会議の概要（議事録）

<table>
<tr><td>会議の名称</td><td>（番号）
1−４９</td><td colspan="3">墨田区基本構想審議会　第２部会（第４回）</td></tr>
<tr><td>開催日時</td><td colspan="4">令和６年１０月２８日（月）　１９：００から２１：００まで</td></tr>
<tr><td>開催場所</td><td colspan="4">墨田区役所１７階　墨田区議会第１委員会室</td></tr>
<tr><td>出席者数</td><td colspan="4">【委員】鈴木みゆき（部会長）、角山剛、鎌形由美子、駒村康平、庄司道子、西村孝幸、平林秀敏、山口亮、山室学（計９名）
【事務局】楠政策担当課長、政策担当主査（矢野）</td></tr>
<tr><td>会議の公開
（傍聴）</td><td colspan="2">公開(傍聴できる)　部分公開(部分傍聴できる)
非公開(傍聴できない)</td><td>傍聴者数</td><td>５人</td></tr>
<tr><td>議題</td><td colspan="4">１．前回の振り返り
２．健康・保健衛生に関すること
（１）区民の健康づくりの望ましい姿について
（２）地域包括ケアシステムの充実について</td></tr>
<tr><td>配付資料</td><td colspan="4">１．次第
２．福祉分野における未来予想図（修正案）【資料１】
３．子育て、教育分野における未来予想図（案）【資料２】
４．基本構想検討シート（政策４５０）【資料３】
５．前回の振り返り等【資料４】
６．委員アンケート（第１回部会資料の抜粋）【資料５】
７．第４回部会への情報提供（山口委員提出資料）【資料６】</td></tr>
<tr><td>会議概要</td><td colspan="4">１　事務局からの伝達事項
事務局より配布資料の確認及び審議会の公開に関する説明を行った。

２　前回の振り返り
事務局より資料１について、説明を行った。
（事務局）
前回提示した福祉分野における未来予想図では、「やさしいおせっかいがウェルビーイングを高めるまち」としていた。
しかし、「ウェルビーイング」と言う言葉が難しい、区民の方に伝わらないから別の表現にした方がいいのではないかというご意見をいただいた。委員からの意見を踏まえて、「ウェルビーイング」を「しあわせ」に置き換え、「やさしいおせっかいで地域のしあわせを育むまち」とした。

（鈴木部会長）
今の件についてご議論したいが、ご意見がある場合は挙手にてお願いする。</td></tr>
</table>

	（鈴木部会長） 　墨田区は「つながり」という言葉を大切にしていて、「地域のつながり」がしあわせにつながっていくという認識でよろしいか。 （事務局） 　その通り。 （角山委員） 　「しあわせ」はひらがなで表記するのか （事務局） 　ひらがなで表現することでより優しい表現にした。 （鈴木部会長） 　柔らかい感じがする。あと、駒村委員から発言のあった「場と出番」がすごく気に入っている。他に意見がないか。 ＜委員からの意見なし＞ （鈴木部会長） 　福祉分野に関して、この内容を未来予想図案とする。次回、３分野のまとめをする際に、改めて議論の場を設ける。その際に、全体を見て再度意見を頂戴する。 　前回に引き続き、子育て・教育分野の議論を行う。 　事務局より資料４の１ページ～４ページ目及び資料２について、説明を行った。 （鈴木部会長） 　子育て、教育分野は大きなテーマであるが、前回は時間が短かったこともあり、前回言い切れなかった部分を含めて意見を頂戴する。 　まず始めに、山口委員から資料６の説明をお願いする。 （山口委員） 　説明の前に一つ確認するが、墨田区では「こども」の定義は存在しているのか。 （事務局） 　こども基本法に基づく区市町村版のこども計画の検討を進めているが、まだそれが出来上がってないので、はっきりと定義していないのが現状である。児童福祉法上においては 18 歳未満であるが、こども基本法の中では心と身体の発達の過程にある人を「こども」としている。基本的にはこども基本法の規定を横引く形で、はっきりと何歳まででではなく、発達段階に応じてという表現でのまとめ方になることを想定している。

	（山口委員） 　審議会の中で学力の話が出てきているが、少し違和感があり、教育の目的は学力を向上させることではないと思う。 　資料６に記載があるが、重要なのは子どもがどのように育っていって、最終的にどうなるのか、人格形成されて自立していくことが教育の目的かと思っている。この辺が今までの審議の中で少し曖昧になっていると感じている。 　また、別紙で日本財団の自身に関する意識調査結果を載せているが、世界的に見た場合、日本の子どもたちは「将来に対して夢を持っていない」、「自分は大人だと思っていない」、「自分の行動で社会を変えられると思っていない」など、他の国との差が大きいと感じている。 　さらに、「学校で勉強する意味」、「仕事を選ぶうえで重視するもの」や「なりたい職業」の中で、「特にない」という回答が圧倒的に多いのが日本である。これは、日本の今の子どもは「大人になる」、「将来その社会に出ていく」といったことに対してのビジョンがすごく不足していると感じる。学力が上がっても結局こうしたところに結びついていかない。 　むしろ、子どもたちにきちんと将来のビジョンをそれぞれが持てるよう考えさせられるような教育をしていかないといけないのでないかと思っている。 　子どもたちが自分で考える力をすごく失っていると思っている。自分はワークショップを小学校３年生の子たちにやっていた中で、メモを取れない子がほとんどだった。それは学校で先生が板書した際に、ここはノートに取らなくていいよって指示を受けるので、子どもたちはその指示に従うだけである。もちろんこれは単なる一例だと思うが、こういったことが学校の中ではすごく頻繁に行われていると思っている。学校の現場の中でも子どもたちに対して、教育の意識が何か違う方向にあるのではないかと思っている。総合的な話なので、具体的な話は言えないが教育の在り方を１回見直す必要があるのではないかと思い、資料６を提出した。 （事務局） 　以前、墨田区基本計画を配布させていただいたが、教育分野では知・徳・体のバランスのとれた教育を行うとしている。学力に特化しているわけではないというところはご理解をいただきたい。もちろん体力や心といった部分も非常に大切にし、バランス良くしていかなければいけない。ただ一方で、未来を子どもたち自身が切り開いていくためには、基礎的な学力は間違いなく必要であるという認識を持って教育施策を進めている。 　メモの部分はあくまで一例だと思うが、全ての学校、全ての先生がという話ではないとは思っている。子どもを育てていくのは学校だけではなく、今回の未来予想図案の中でも書かせていただいているが、地域や家庭が、一緒になって子どもを育てていくという意識がすごく大事であると思っている。学校では、基礎的な学力をしっかりと身に着けてもらう中で、ここはしっかりメモを取らなくてはならないといったようなことを言わなければならないタイミングも場合によってはあると思っている。全部学校に任せているから親は何もしなくていいとなると、それこそメモを取らないことにつながることにつながる部分もあると感じる。 　そういったところから山口委員のような活動されている方と連携、情報共有をし

	ながら、行政が行っている取組とシームレスに子どもを包み込んで育てていくような形のまちを目指せるといいんのではないかと思っている。 （山口委員） 　連携に関して言うと、コミュニティスクールの進捗はどうなっているのか。 （事務局） 　教育施策大綱の中でもコミュニティスクールの推進を掲げている。コミュニティスクールは、前回も委員から話をいただいた通り、地域や保護者などが一緒に学校運営に参画する仕組みである。学校運営協議会が学校運営の基本方針を承認する、学校運営に関して意見を述べることができる、教職員の任用について意見を出すことができるというような一定の権限と責任を持つことができる仕組みであると認識をしている。墨田区の場合、コミュニティスクールが始まる前から学校運営連絡協議会というものを持っている。地域の方やPTAの方々などと一緒になって学校運営に取り組んでいる。学校運営連絡協議会では、意見交換、情報共有などを行ってきているが、コミュニティスクールのような権限と責任を持つという位置づけではなかった。今までやってきた学校運営連絡協議会を基盤にしながら、コミュニティスクールに順次移行していく考え方は持っている。 　しかし、今までやってきたものが急に責任とか権限っていうのが出てきてしまうため、いきなり広げると混乱が起きるかもしれないという中で、昨年の10月に八広小学校がモデル校として、始まった。モデル校の中で出てきた課題などを整理した上で、今後コミュニティスクールの取組を順次拡充していくと聞いている。 （山口委員） 　学校運営連絡協議会には地域の人は参加可能なのか。 （事務局） 　学校運営連絡協議会では、例えば、PTAの方々の他、民生児童委員の方、さらに児童館の館長や青少年委員長会会長、そういった方々に参加していただいている。 （鈴木部会長） 　ほかにご意見がある方はいるか。 （平林委員） 　まず一つが、色々な体験の機会が提供される場所や場面が多く生まれるような共生社会になっていってほしい。墨田区ではあわの自然学園などがなくなって、自然体験となると福島にある国立青少年自然の家に行くことになっている。都会ということもあるが、自然体験みたいな色々な機会を通して、自分がこういうことができるという気持ちや、思いを持ってもらえるそういうきっかけを提供できれば良いと感じている。また、わんぱく天国が元々羽根木のプレーパークをモデルとして作られたということもあるが、今の運営が少し寂しくなってきている感じがする。ここに来ればいろんな体験できる、そういう場所が墨田区にもあると良いと感じてい

	る。 　もう一つが、PTA 会員をやっているが、保護者の中では自分はそんなに関わりたくないから PTA 会員にはなりたくないといった方が非常に多くなっていると実感している。小学校を中心に、PTA から離れている家庭もたくさん出てきているのが事実。その理由は大変だからというようなところもあったりすると思うが、PTA の活動はコロナをきっかけに整理がされてきている。子どもたちへの教育は学校教育活動の支援をするという考え、それを保護者がしっかり支えることによって、伸びていくというような考えのもとから、誰も参加しない PTA 活動をなくして、例えば運動会や子どもたちが何かやりたい行事のところに支援できるような形に持っていこうとする PTA が結構増えてきている。運動会や文化祭などに参加して見に来るのだから、せっかく見に行くのだから少し手伝おうかみたいな、そういう気持ちになってくれる保護者の方が多くなってくれると良いと思っている。こういうようなことが福祉に関わる地域共生とかにもつながっていくのではないかと感じている。 　あと、連合陸上競技大会を以前は国立でやっていたが、今はフクシエンタープライズ墨田フィールドでやっている。今回は 70 周年記念ということで、国立でやった。運営する先生たちは大変であったと重々承知はしているが、実際にあそこに立った子どもたちや先生の表情を見ても、世界の大舞台となっている会場に立って、そこで走れる、そこで応援できるというところは多くの子どもたちに感動をもたらしたと感じている。そういう夢を与えられるような教育がどんどん実現されると良いと感じている。 　特別支援級の子が、今学校の中で一緒に学んでいるところがあるが、そういう環境をどんどん増やしていき、マイノリティの子でも、自然に触れあえることのできる、そのような環境が増々できてくると良いと感じている。外国人、障害、LGBTQ など色々とあるが、そのような子どもたちが社会に出て色んな人に出会って同じように接してあげられる、そういう機会を小さいうちから提供できると良いと感じている。 　先ほど学校教育の話があったが、親としては、学力が高くなって、体力も向上して心が穏やかに育つことはすごく望んでいる。今の墨田区の学力はどんどん伸びてきているところもあるので、それを伸ばしていってほしい。ただ一方で、この間、子ども・若者計画のアンケートの中で、不登校の子たちが新しいことを学ぶことができる、やりたいことにチャレンジできるような機会があると良いといった結果が出ていた。それと自分の欠点や失敗をしてそれが怖いというような意見もあり、自己肯定感などをより伸ばせるように感じる、そんな教育環境ができると良いと思う。それには地域の人たちと関わったりしながら自己有用感を得られる社会に、墨田区の教育環境ができていけると良い。 　先ほどスモールステップルーム、ステップ学級などの話があったが、学校に来なくても、もし行けなくても、地域に不登校の子たちが行ける場所、スモールステップルームのところみたいなものが増えていき、どんな子でもどこかに行ってそれぞれの持つ子どもの可能性を引き出してもらえる、伸ばせるような環境、受け止めてくれる地域が墨田区にどんどんできてくると良いと考えている。

	（鈴木部会長） 小・中学校と地域でつながりを持っていくということが、すごく大事になると思う。 （西村委員） 私は就学前の子どもたちを常に見ている立場であるが、いつも考えているのは子どもたち自身が課題を設定して、子どもたち自身がその課題に向かって解決する方法を考え、自分1人でできなければ仲間を募り、そして課題を克服し、克服した後でまた次の課題がまた見えてくるというようなことができる良いと思う。いわゆる生きる力を乳幼児期に作りたいと日々考えている。 そういうことを考えながら10年後の姿を見た時に、最初に「無限の可能性を秘めています。子どもたちを取り巻く環境によって子どもたちが何かを諦めるのではなく」というのはすごく分かるが、最初から「諦めるのではなく」というネガティブワードが来ているのが、どうなのかなと思うのが一つある。そういうのを踏まえた上で、その取り巻く環境を乗り越えるのも生きる力だと思う。 それも含めて子どもたちが環境の中で今自分たちは何をしていくのかということで、環境全てを取り除くのではなく、この中で自分は何をすればいいんだろうというようなことを考えていく、そういった意味で、やったからにはその言葉だったり行動だったりの責任を持つ必要があり、市民づくり、市民としての権利も義務もきちんと追って、そこには行動に責任を持つような市民をつくっていく。行動するには興味関心や探究心といったことが必要になってくる。そういった部分をこの地域の中でどうやって育めるのかというようなことをどの部署も考えていただけると良いと思っている。 例えば児童遊園に大型遊具があるが、遊ぶルールが決まっていたりする。こっちから登って、こっちから降りないといけないみたいな、そうしないとうまく流れないみたいな遊具が本当に生きる力を育むベースになっているのかということ。そうではなくて、自分たちで遊び方を考えられるような公園になっているのかなど、「こどもまんなか」というのであれば考えていく必要があると思っている。 大人の立場で言うと、例えば保育所、前回も少し話が出てきたが、保健・教育という部分が今回新しく保健センターができて、一体化するという形ではあるが、真の意味で連携が取れるようにしていくためにはまだまだブラッシュアップが必要だと思う。そういった意味では、個別的な支援が必要な子どもが増えていると実感しており、そのような子どもたちに対してどういうアプローチができるのか。保育所だけではできない、療育機関だけでもできない、保健部門だけでもできない、でもこれらが連携を取ることによって初めてできてくる。そういったところで色んなことが伸びていくのではないかと思っている。 この2点について、書きぶりを考えていただけるとありがたい。 （鎌形委員） 下の子が中学を卒業したのが32年前であるが、先ほど話のあった学校運営連絡協議会や、各中学の育成委員会の運営の仕方が全然変わっていない。これだけ時代も変わって、デジタルが普通になっている時代に、教育委員会が立ち止まって考え

	ないといけない。PTA に関わるのが嫌だという方が多い中で、その中でもまた熱心な方が結構犠牲を払って運営しているから、やっている方は大変だが、その割には効果が上がってない。色んなイベントをすると、委員の方が多くて、参加する子どもが少なくて、子ども１人に対して委員が２人付き添うこともある。今の子はすごく忙しい。何ヶ月先の土曜日の何時にケーキや和菓子を作るといったいいアイデアもあったりするが、本当に参加する人が少なく、それに対する運営委員の努力や育成委員がとても大変なので、本当に子どものためになるような運営の仕方に大きく変えないといけない時期に来ていると感じる。運営連絡協議会も、町会長もいるではなく、町会長がいるという感じはしている。大きい声が通ってしまう風潮があるのではないか。 　例えば民生・児童委員の方たちが、例えばいじめがあると聞こえるが、校長先生たちがあまり言いたくない、町会もいじめではないのではという思いが一致して、議題に上がりにくい雰囲気があるように感じる。今も聞いてみるとそういう運営の仕方が結構多いようで、全部の学校かは分からないが根本的に変えていかないといけないと思う。 　いじめの時にある新聞報道などによると、近所の人はみんな知っていたのに、何も把握していなかったのは学校のみといったことが時々ある。そういう意味では、地域の人をそういう協議会に入れることはとても大事だと思うが、もう少し上手に機能するような運営の仕方をお願いしたい。 （庄司委員） 　PTA の存続もままならなくなってきていると聞いて、私も隅田特別支援学校の PTA 会長をやっていた頃、嫌々やるよりは楽しくやろうねとみんなで言っていたが、そういう時代ではなくなってきている。今の若い保護者は時間的にも気持ち的にも余裕がないのかなと感じている。 （鈴木部会長） 　PTA をすることによって学校の中が分かったり、色々な子どもたちの様子が分かったり、我が子だけではなく、そういうメリットはすごくあると思うが、本当に忙しい親が多いと感じる。 （駒村委員） 　女性の就業率が先進国の中でも一番になっていることから、それは忙しいのだと思う。それから不登校の話であるが、幸いなことに首都大学東京が２回ほど調査に入って、不登校に関する分析は詳細に行われている。その結果、１人親世帯や困窮世帯で不登校の発生率が多い。あと、うつ的な症状を持っている子どもが多い、当然ながら学力の足を引っ張っているということも分析で明らかになっている。今日の資料の中では、家庭環境と書いてはいるが、はっきり言えば、子どもの貧困問題が背景にある、これらは首都大学が詳細な分析しているので、これは真正面から見た方が良いと思う。 　それから地域に開かれたガバナンス、運営に関する議論が多かったが、何かそういう意味で開かれているのかどうかという話が気になった。私が少し前に行った名

	張市は、小学校の１クラスで何人かは授業中に歩き回ってしまう子がいると、先生が追いかけ回していると授業にならないので、地域の高齢者に学校の手伝いに来てもらって、なだめ役をしてもらっている取組をやっているが、そういう意味で開かれたというのは墨田区にはイメージがない。 （事務局） 　発達段階で支援が必要な子どもが増えてきているのは、墨田区でもあると聞く。そういったことに対応するために、支援員を配置している。学校というところで、今のところはきちんと責任を持って、仕事をやってもらうというところで配置している。指摘のあった通り地域の高齢者の方々に、ボランティア的な形で入っていただくというところまでの開かれた取組は墨田区においては少なくとも行われていない状況である。我々としては、しっかりと人を配置してそういったものにも対応していくという考え方を持っているというのが現状である。 （鈴木部会長） 　朝の読書、例えば読み聞かせを、保護者が入っているというのはないのか。 （平林委員） 　ある。地域の読み聞かせボランティアや保護者がやってくれている。 （駒村委員） 　課題のある子どもを支えるプロというよりは、地域の関わり方の話である。地域の高齢者も学校を身近に感じてもらうと、子どもたちも高齢者を身近に感じてもらう場として使っていると、専門性があるからプロでないと駄目というと何でも学校の中で完結して塀を高くして、地域と学校の連携はなかなか難しいと思う。 （鈴木部会長） 　そこの段差をなるべく低くしていくということだと思う。こうしたことを１０年後の予想図に表現をしていただきたい。 （角山委員） 　「子ども」と表記をするときは、子は漢字なのか、ひらがななのか。 （事務局） 　先ほどもお伝えしたこども計画の策定作業の中で、今まさに議論しているところである。現状、「子ども」が、墨田区での表記である。一方で、こども基本法ではひらがなで「こども」となっている。児童福祉法もある中で、「子ども」と「こども」を分ける方が良いのか、墨田区の「子ども」の表現は統一した方が良いのか、議論になっているところでもあり、現時点でははっきりとした定義ができていないのが現状である。

	（鈴木部会長） 　すごく難しいと思うのは、こども家庭庁は「こども」と表記しているが、こども家庭庁の中の子ども・子育て支援分科会は「子ども」となっている。それは内閣府の子ども・子育て会議がそのまま移行したから。 （西村委員） 　恐らく、来年にこども基本条例を作ろうという話を聞いている。基本条例を作るのであれば、子どもの定義をしないといけないので、そこがかなり大きな話になってくるのではないかと感じている。 （事務局） 　ご指摘のとおり。先ほど山口委員からのご指摘もあったが、「こども」の定義、そこをしっかりと整理していかないといけないと考えている。 （角山委員） 　「子育て」は漢字であると思うが、子どもと言った時にイメージ的にひらがなにした方が良いというようなレベルではなく、やはり子どもとは何なのかということをきちんと定義しておかないといけないと思う。 （事務局） 　こども計画自体は今年度内にまとめていく予定であり、先ほどあった条例についても、来年には制定する方向で検討を進めているところである。この基本構想がまとまるまでには「こども」の定義を整理できると思うので、現時点ではそこは少し幅を持って議論いただきたい。 （鈴木部会長） 　次回の会議までに、子育て・教育分野の未来予想図の修正をポジティブな表現でお願いする。 　次に、保健衛生をテーマに議論を始めるに当たり、議論の前提となる考え方を事務局から説明をお願いする。 　事務局から資料３について、説明を行った。 （鈴木部会長） 　一つのテーマについて、およそ３０分をめどに意見交換をしたい。まずは、「区民の健康づくりの望ましい姿」から議論を始めたい。 （山室委員） 　健康づくり、一番大切なのが良い生活習慣を心がけることであるが、なかなか難しいと思う。特に食事、運動。高齢者はかなり栄養状態の悪い方がいるため、そこが一番心配している。閉じこもっていて、周りの人との交流のない方は、できたら食事とかを周りの人と一緒にやってもらうと効果がある。反対に悪い習慣は、タバ

	コ、薬、お酒は何とか減らしていってほしい。 　予防接種については、色々とデマがあったりする。HPV ワクチンをやると、不随運動が出るということで国も接種を止めたこともあった。区民の方には正しい知識を持っていただきたい。 　健康診断も重要で、大きな会社であれば問題なく受けていると思うが、小規模な会社の人たちが受けてないかもしれない。小規模な事業所は墨田区ではかなり多いところで、その辺がその会社の健診の結果が使われているかどうか、受診につながっているか悪いデータが出た場合は保健指導を受けてもらえているかなどは分からない。健康診断の結果、個々の結果、データを活用するにしても保健計画課などの保健士がやっているので、それを上手くデータを取り出せるかどうか難しいところがある。レセプトのデータも区で取り出せると思うので、そういったデータを活用するのが得意な人たちが区の中でいると思うので、その人たちが上手くデータを使っていってほしい。上手く活用できれば他の地域との比較もできたりする。 　あとは、健康保険事業に関しては、意見を言えるような会議体も作ってもらっているため、だんだんと良くなってきていると思っている。 （鈴木部会長） 　医師会は学校などに入って健診をしていただいている。学校で保健講座のようなものはやっているのか。 （山室委員） 　まだできていないが、これからどんどんやっていきたいと思っている。 （鈴木部会長） 　先週、インフルエンザの予防接種を受けたが、お金がかかる予防接種がある。 （山室委員） 　高齢者は無料になったりするが、地域によって違うと思う。 （鈴木部会長） 　子どもへの接種は無料ではないため、実際に高い、お金がかかるからと言って受けない家庭層がある。墨田区ではこういったことも起きている。 （山室委員） 　定期接種になっていると無料になるが、そうでないものもまだある。 （事務局） 　任意接種ワクチンに関しては、まだまだ無料というところまでなかなか踏み込んでないものが多くあると思っている。一方で所得階層に応じて無料にしている任意接種もあったかと認識している。この辺の考え方の整理、墨田区の中で、全てみんな無料とするのが良いのかということがまず一点あるかと思う。一方で健康を守るという視点の中で、誰もが健康であり続けられるまちというのは将来像として考え

	ていく必要があると思っている。 （角山委員） 　先ほどアルコールやタバコといった悪い習慣と良い習慣というのがあった。要するに考え方としては、マイナスをなくすということとプラスを増やしていくこと。例えばマイナスをゼロにという考え方があり、もちろんそれは普通に考えられるわけだが、それと、一つはプラスであればもっとそれをのばしていけば良いという、これ心理学でいうとポジティブサイコロジーと言い、この領域が２１世紀に非常に発展してきた。その中で出てくるのが、マイナスをゼロにという考え方だけではなく、プラスをもっとプラスにという考え方が出てきているから、それも健康というのはマイナスをなくすっていうことに加え、プラスを増やすということが必要であると感じている。 　そのためには、呼びかけだけではなく、何か仕掛けが必要だと思う。仕掛けというのは例えば、私の前の職場の健診を通じて、あるサイトから色々な紹介がくるが、そこに登録して、月に１回でも週に１回でもアンケートなどに応えるとポイントが貯まるというような仕組み、貯まると何かに使えるといった、要するに参加すると特典があるもの。スポーツ活動や健康活動もそうだと思うが、そういったものが何かプラスに引っ張っていくということで必要ではないか。 　それから今回勉強のため調べてみたら、見える化ということで、静岡県は県民の特定健診データを分析して、それを全部県の地図に落とし込んでいる。それで市町村の健康づくりに資するような健康マップを作成している。一般の私達がどこかにアクセスすればそれが見えるような、何かそういうような仕掛けも良いのでないかということで、見える化とそれから参加への促しが必要であると感じている。 　心理学で面白い実験があって少し紹介したい。これはかなり古い実験であるが、頭で分かっていてもなかなか実践が難しいというものがいっぱいあると思う。新しい食習慣を導入するといったアメリカでの実験であるが、当時レバーを食べる食習慣がなかった時代に、戦後アメリカもだんだん肉が不足している時期があって、食習慣の導入について、どうすればレバーを食べてもらえるのかといった実験があった。講義形式で説明して食べてくださいというようなやり方と、それからグループを作ってグループの中で話し合いをしてもらう。その後１人１人がみんなの前で私は１週間に１回レバーを食べますとか、家族にこんな形で料理を提供しますと言った宣言をする。それをやった後、１ヶ月後の実施率を調べてみるとやはり実行率に単なる講義形式の場合よりも、実際に皆の前で宣言した方が、3 倍ぐらい実行率が上がった結果となった。 　いわゆる他者とグループの中で色々な悩みを共有する、あるいは情報共有する、その後に行動宣言することで実行が促進される。そういうような仕掛けのようなものを、健康という点でプラスをさらにプラスにすることができると良いのではないかなと思っている。タニタも健康ポイントというのをやっており、もちろんそれは有料であると思うが、何かそういうようなプラスになるような促進するような働きかけを取り入れていくことで、健康・保健衛生に何かプラスになるものができてくるのではないかと思っている。

	（駒村委員） 　今見える化という話があったので、少し厳しい話をする。健康長寿日本一のまちをつくると言っているが、墨田区の平均寿命が全国で何位かというと、１７００自治体のうち、６５５位という微妙な地位。競ってもということもあるが、やはりはっきり見える化をしておいた方が良い。１位と言うならば、１０年で１００位以内に入るなど目標を立てなければいけない。もう一つ見える化で、健康面では無関心層がいて、その層に訴えても岩盤のようになかなか動かない。ここをどう動かすのかということで自治体も本気にならないといけない。私もこの手の健康づくりのチームに関わっているので、いろんな地域に行ってきたが、例えば新潟県見附市はこのチームのプロジェクトを取り入れて、医療費、介護費の抑制に成功した。統計的にも有意な形で医療費、介護費が抑制できている。そのパフォーマンスを見える化すること、あとは角山委員が言ったようにインセンティブみたいなものを。 　もちろん無関心層はなかなか動かない部分があると言われているが、無関心になるのは子どもの時からの習慣でもあるから、子どものときから始めなければいけない部分もある。見える化をするということと、介護予防をどのくらいやっているか。介護予防で、軽度認知障害から認知症になっていく人間とならない人間とはどういう違いがあるのか、どういう行動をさせると違ってくるのかなど、AI に全部評価させて誘導する仕組みを作ろうとする病院がある。 　介護予防、認知症予防、どれだけ墨田区がどのぐらいのメッシュで、どのぐらいの参加者で、それをやっているのか。例えば、高齢者が行ける距離にそういう教室があるかどうかなど。 （事務局） 　墨田区全体の中で８圏域という形で包括を設けて、様々な取組の支援を行っている。あとは通いの場事業というような形で、高齢者の方々が集まって様々な活動ができるようにするなどの側面支援のような取組は行っている。ただ、問題は場所がなかなかないというところの中で、今年度から民間の事業者の方々にも場所を提供してくださいというようなマッチングのようなところを区で始めたところである。 　そういう中で、金融機関などから会議室の提供があったり、徐々に広がりを見せているが、まだまだ数としては本当に作りたい数にはまだまだ達していないので、通える距離にある人もいれば、通えない距離の人もいる。そこまで綺麗にメッシュが出来上がってないっていうのが現状であると認識している。 （駒村委員） 　年配の親を持っている人から見ると、はるか向こうにあってバスで行くとかいう話になると話にならないし、そもそもどこにあるか分かない人に QR コードを読み込んで確認してくれと言われても、必ずしもそれができる人ばかりでないので、これは急いで増やしていかないといけない。軽度の認知障害から５年で半分は認知症の方に入っていく状態と言われているから、そこは早め早めにかなりのきめ細かい場所作りをしてあげないと、後々大変な財政負担になってくると思っている。

	（鎌形委員） 　正式な名前よく覚えていないが、食品衛生会議が年２回ぐらい開催されており、食中毒に気を付けている団体や商店街連合会などかなり広い範囲の方が参加している。今度保健センターが新しくなって、不便になった方もいるとは思うが、とても先進的な場所になると思っている。今までの保健所、両方とも見学したことがあるが、ここで検査をして正確な数値が出るのか疑問に思っていて、汚かったりしたので、そこは新しい保健センターに期待したいと思っている。 　それから先ほどからの健診であるが、男性の高齢者が受診しないように思われる。区から聞くと一般的な健診は受診するが、２次検査を受けない傾向でいるようである。このこともがんで亡くなることにつながってしまうのではないか。私も何かあるごとに受診を勧めてはいるが、なかなか効果が出ない。 　今の胃がんの検診は、胃カメラとそれからバリウムがある。以前出た会議で検診がバリウムだけだった時に、胃カメラの方は軽い麻酔も使え、受ける側も楽なので実施してほしいという意見が出た。そうしたら２年後ぐらいには胃カメラも受けられるようになっており、一般的な声もよく拾ってくれているなと思った。 （庄司委員） 　健診について、区の方で大きな予算を取って実施していると思うが、受診しない人が多くてもったいないと感じる。 （鈴木部会長） 　広報の仕方にも問題があるのではないか。 （平林委員） 　健康づくりということで、高齢者の話が中心になっているが、子どものことを考えると学校給食が挙げられる。以前連合会長やっていた時に、給食に鉄がすごく不足しているというような話があった。さらに物価が上がってきて、給食費も上がって給食にかかる予算も上げざるを得ないような状況になり、大変だなと思っていた矢先に学校給食無償化という話になり、無償化になるのはありがたいが、栄養バランスがとれる給食を出してもらいたいと要望で出したこともあった。給食でしか栄養を取れない世帯がいると思う。そういう子どもの健康づくり、栄養面をしっかりとやっていっていただきたいと思っている。 　資料で予防接種のことが書いてあったが、コロナのときの予防接種は、墨田区は全国的にすごく良いモデルであった。勤め先は墨田区外であるが、職場の人からは墨田区をいいねと言ってもらったこともあった。あれだけ迅速にシステマチックにやってもらえるような、何か緊急事態があった時の医療体制、それと教育に関しても子どもたちに何が一番適切で良い形であるのかというふうに、医療と教育がすごく密接に協議しながら、対応してくれたところも良かったと思っているので、ぜひこのような予防接種の仕組みを続けてほしいと感じた。 　地域包括ケアの充実のところに少し被ってしまうが、山室委員が言っていた、周りの人と一緒にみたいなところがすごく大事だと思っていて、地域の方々が気軽に自然に何気ない会話をできるような居場所作り、一緒に健康体操ができるような、

	そういう場面であったり、必要な情報をいかに入手できるかということ。これから高齢社会にどんどんなっていく中で、デジタルデバイドの問題もあるが、今後はパソコンを使っている人たちがどんどん高齢者になってくるので、情報を取れる人が増えていくと思うが、パソコンを使っていない人たちがいかに情報入手できるか、デジタルデバイドの人たちへの情報提供をしっかりとやっていった方がいいと思っている。そういう必要な情報が手に入れば、色んな方々が健康づくりをやろうとか、学校の方でも地域の方々が参加できるようなイベントに来れたりするので、そういうのは高齢者が参加できて自分の関心がある場面に参加できる環境の構築ができてくると良いと思っている。 （西村委員） 　１歳半健診、３歳健診があるが、得られる情報がすごく大事だと思っていて、それをどのように家庭、そして例えば保育園のようなところで共有できるか、最近やはり個人情報の壁すごく大変だといつも感じている。どうやって乗り越えようかというふうに考えながら話をしているところがある。 　例えば、今、５歳児健診という話も出ていると聞いているが、５歳で何か見つかった、個別的な支援が必要だという診断がされた時に、果たしてそれが学校現場で実際に許容できるのか、一校やるだけではなく全てが仕組みとして整えていくことが大事であると感じている。個別的な支援が必要な場合、療育機関の心理士と、例えばうちの保育園で巡回している心理士とは全くコンタクトがなく、保育園を経由して専門家同士の話を伝え合っているみたいなことが起こっている。やはりそういったところが、連携がどのようにできるかということも大事だと思う。また、こんにちは赤ちゃん事業の保健部門で何か気になった時に、少し気になったで１回で終わらせてしまうが、何回か行くことによって、虐待防止につながるとか、そういったところにまでいくと思うので、様々な部署を乗り越える形での連携ができてくると、そういった悲しい事故などが少し減っていくのではないかと感じている。 （山口委員） 　自分は健診とか全然受けない男で、正直墨田区の病院にもあんまりいい印象を持っていないので、病院もずっと足が遠のいている。島根で始まったコミュニティナースという、医療職のドクター、ナースや薬剤師などが病院を出て、まちで活動する取組の研修を受けて、その関係で知り合った仲間がたくさんいる。 　例えば、アレルギーの処方薬と市販薬で何が違うのかみたいなことを知り合いの薬剤師に聞いたらすぐ返ってくる。相談窓口もあると思うが、知らない人に相談しても、専門家だと本音と建前を使い分けているかもしれないし、知らない人をそこまで信用できないなみたいのがあって、知っている人だとすごく安心できると思う。 　以前に京島モデルということで紹介した福祉事業者が、今キラキラ橘商店街の中で事業所を構えて準備中であるが、その建物自体は就労Ｂで行くことが決まったようである。そこで暮らしの保健室というのをやっており、暮らしの保健室は高田馬場で始まった取組であるが、コミュニティナースが結構関わっている。医療相談みたいな感じではなく、もっと気楽な感じで行ける窓口があると、先ほど言っていた

	お金がなくて健診に行けないみたいな人も気楽に相談に行けるのではないかと思っている。医療といった硬い感じの窓口ではなく、もう少し距離が近づくような取組があると良いのではないかと思っている。 （鈴木部会長） 　健康寿命と言う言葉があるが、貢献寿命という言葉もある。要するに自分は役に立っているということが、人を健康にするというのがあって、その貢献寿命がやさしいおせっかいとつながるのではないかと思っている。例えば、墨田区の子どもの生活習慣がすごく悪い。とても遅寝であったり、運動も足りない。そういう、例えば保育園で重役登園、１０時過ぎぐらいに登園する子に朝すごい楽しいリズム遊びとかをする。地域の高齢者も呼んで一緒に体を動かそうみたいな形にして、そうすると子どもが面白く感じると、何とかその時間に登園するというような例が実はある。そして、西村委員が先ほど言ったように組織と組織の壁をなくしていく、そこを地域でベタで広げていくというところを少し作ってみるのも面白いと思っている。貢献寿命は、意外と墨田区には合っているかもしれないと思っている。 （山室委員） 　薬剤師が熱中症対策を行っている。薬局を涼み処として開放している所があり、色んな薬剤師の先生、栄養士の方とのつながり、いろんな気楽に話せるようなことはあるのではないかと思っている。 　あともう一つは、災害時、有事の時、感染症がすごく流行った時の対応を何とか平時のうちからの対策や、災害医療訓練をやっているが、どんどん進めていきたい。 （駒村委員） 　貢献寿命はオリジナリティがないので、おせっかいという言葉でおせっかいをする方もされた方も寿命は伸びるので、おせっかい寿命でどうですか。 （鈴木部会長） 　おせっかい寿命は墨田区らしい感じがする。出番があるというのはすごく大事なことだと思う。 　ここで次の議題の「地域包括ケアシステムの充実」に移らせていただく。 （西村委員） 　いわゆる今８つある包括、ない時とではずいぶん変わったと思っている。設置されてからだいぶ経つが、そこでカバーしきれているのかといったことはあるかと思っている。地域包括、見守り相談室をまだ知らない高齢者の方もたくさんいる中で、認知度をどうやって上げていくのかが、すごく大事だと思っている。そこには関連される方、例えば介護事業所の方やヘルパーの方、町会の方も、民生委員など様々な方がつながっていくことが大事で、その拠点としてあるのが、事業価値になると感じている。ニーズがますます増えていく中で、その機能をどうやって充実させていくのか、進化させていくのかというようなところが課題になってくると漠然と考えていたりする。

	（山室委員） 　地域包括ケアのシステムには色んな職種がもちろん関わっており、私達医療機関や、ケアマネとかヘルパーさんなど。今は包括との関係は大体上手くいっていると思うが、医療機関の中でもまだしっかりつながっていない医療機関もあったりする。 包括から医療機関に相談したいとなった時に、受けてくれる医療機関がそんなに多くないので、その辺はもう少し時間の中でも広げていきたいと思っている。 　色んな情報を伝えるときに、顔の見える関係ということで、手渡しで情報を伝えるのが多かったが、最近はSNSを使って情報共有をしても良い方向になったので、良かったと感じている。 　先ほど通いの場の話が出たが、通いの場の数は区の方が教えてくれるが、実際に通っている人がどのくらいいるのか全然分からないため、はっきりしてもらうと有難い。通いの場に関して高齢者のいる家庭に何か配られていたような気がするが、どの程度見てもらえているのか分からなかったりする。 　それから、人間最後があるので、その時どうするのかというのを今から考えておく必要もあるのではないか。 （平林委員） 　地域づくり、仕組みづくり、意識づくりが重要である。SOSが出せなかったり、困りごとをどう拾い上げるかというところに、先ほどの地域の方々、などが、どのような形で拾うか、拾ったものをどう適切な機関につなげられるかというところでつなげる先のネットワークも必要である。先ほど企業の会議室という話もあったが、色々な資源を理解するというところも必要であり、それには視覚情報を伝えていくというところも必要であると感じている。それをいかに地域の方と一緒に作っていくか、居場所をどう作るかみたいなものの地域づくりというところも必要であるかと感じる。 　学校の方では高齢者の実態みたいなところで、埼玉県のどこかの中学校がごみ捨てを学校にやらせてほしいということで、非難受けたような事例もあったりした。あれもひっくり返すと、子どもたちが地域の高齢者を知るというところで、一つのきっかけにはなるのではないかと思っている。子どもたちが普段登校のときに１人暮らしの高齢者がここに住んでいる、ゴミが出ていない、新聞が溜まっているなどそういうところを発見してそれを学校から適切な機関、包括につないで見守りするといったことが、地域包括ケアの充実につながっていくと感じている。 （鈴木部会長） 　見守られて育った子が見守る側になっていくっていうことは良い。 （庄司委員） 　知的障害のある人も、高齢化が進んでいて、６５歳を過ぎてても、若者と一緒に作業所で仕事をしているケースがある。高齢者のデイサービスのようなところにも行っていいはずであるが、本人が、あそこは年寄りばっかりだから行かないという笑い話もあって、その辺ケアマネージャーと、障害者の方の相談員、ケースワーカ

	一が情報交換していく必要がある。対応の仕方が高齢者と障害者微妙に違うと思う。その辺がなかなか進んでいかないのが、気になる。 （鎌形委員） 　先ほどから出ている包括の中には、高齢者支援総合相談、それから見守りがあるが、どこにでも見守りがあるわけではない。墨田区はかなり早くから見守り相談室があって、機能も充実している。今、福祉の隙間から漏れてしまう人、福祉すら知らない人たちも網羅的に訪問しているので、そういった意味では機能していると思っている。ただ、今こういう時代なのでなかなかドアを開けてくれない。その辺が難しく、民生委員と一緒に行くと、民生委員のことは知っていてドアを開けてくれるということもある。 　一方で、コロナの時代が長かったので、その頃に民生委員になった人たちは訪問するっていう民生活動をあまり経験していないので、そのことがすごくその重荷になっている。その前から民生委員としては活動していた人にとっては当たり前のことで、また復活したということであるが、新しい民生委員さんからするとこんなことまでさせられるのかと思われてしまい、その辺は民生委員の中でも、全国的にどこでも悩んでいるのが現状である。 　墨田区も例外ではなく、新聞に投書している人もいる。投書の内容としては、例えば敬老のお祝いを、見守りも兼ねて民生委員が配っている。しかし、こんなことまでさせられるのかと捉える人にとっては 1 件いくら報酬を払うべきだといった意見もある。それから生活保護の話になるが、名簿を受け取っているが、民生委員のすべきことではないということも投書で書かれていた。その意見があながち間違いでもないというようなところもあるが、色々な新しい考え方もあって、先ほどの学校の問題だけでなく、民生委員、福祉活動も時代が変わってきているので、今までやってきたからということだけで通すのは、難しい時代になってきていると感じる。ただ、墨田区の見守り、包括はとてもよく機能していると思っている。 （駒村委員） 　今厚労省の方ではパワーアップした共生社会の議論が始まっていて、出てくるのが福祉と医療というおなじみの人たちではあるが、民間の先ほどの事業者みたいなものも、スーパーなり銀行なりも、色々な役割を地域の中で果たせるはずだということである。しかし、パブリックセクターの方や福祉の方は、民間とのお付き合いに対して非常にアレルギーを持っている方が多い。相対的には墨田区はあまりアレルギーがない方であると思っている。 　色々な自治体を見るとものすごいアレルギーを持っているところもあるが、そんなことを言っていられる状態ではない。というのも、２０４０年の問題は本当のお一人様が増える。どこかに親戚がいるとかいうレベルではなく、どこにも親戚がいない本当のお一人様が高齢者で急激に増えていくという問題、孤独の問題が非常に深刻になる。 　それから２０４０年ぐらいになると、先ほどお話があったように、死亡する方が増える。毎年２７０万人ぐらいになる。 　このお一人様でありつつ、認知症で１人暮らしている方がかなり増えてくる。死

	に向かう方も膨大に増えてくる中で、恐らく予測も統計も作られているとは思うが、そうすると終末期のサービスみたいなものも準備をしておかないといけない。これが全然進んでおらず、民間の身元サービスとか死後事務といった問題も実際に津波のように押し寄せてくると思うので、この準備も１０年後、１５年後の視野に入れて、もう考え整備しておかないといけない。 「エンディングノート」という言い方で見せるとなかなかつらいと思うが、少しずつ前から準備しておくことが必要で、おせっかいされる側としてのおせっかいノートぐらいから始めるのも良いのではないか。エンディングノートをいきなり書けと言われても難しいかもしれない。 （角山委員） 地域包括ケアと言った場合に、機関と地域住民とのつながりということがあった時に相談窓口の使い勝手、どういった窓口があり、そこにどのようにアクセスできるのか気軽に相談に行けるのか。部会長がよく言っている横串を刺すというような考え方が非常に大切になってくるのではないか。それから他区での話であるが、地域包括ケアという話をするとそこには町内会、老人会という組織の方たちがボランティアで協力してくださって、見守り隊ということで、協力してくださっているものの、見守り隊自体が高齢化してしまっている。なかなか大変な負担をかけてしまうことになってしまうということで、若い人たちをどのようにして巻き込んでいくのかというのが非常に重要になってくると思う。支援を必要とする人への対応のその支援体制の中に、若い人たちを今後どのように巻き込んで協力してもらえるのかということも一つの視点として入れても良いのではないかと思っている。 （鈴木部会長） 地域包括ケアシステムがきちんと機能したらすごいなというふうに思ってはいるが、日常的なことだけではなくどうしても墨田区の場合、防災という視点を考えると、非常時にどこがどう動くのかというところを、研修などしっかりと色んなことをしておいた方が良いと思っている。 資料４の図にあるような輪になっているのが、子育て支援総合センターにもあると良いと思っている。地域包括という言葉をぜひ色んなところで使っていただけると良いかなと感じている。 （山口委員） ２年ぐらい墨田区に住んでいて、色んな高齢者、もちろん障害者の方とか色んな人たちと日々話をしているが、地域包括の話を聞いた記憶がまるでない。それが一番の問題かなと思っている。 ケアを受ける、介護が必要な人たちからしたら必要性が出てくるとは思うが、そうでない人たちにとってはすごく縁遠いいものであると思っている。先ほども話があったように単身者がこれから増えていく中で、そういう人たちがこのシステムにまるで関わらずに生きていくのは結構リスキーなのかなと思っている。 若者とか中学生みたいな話もあったが、そういう、今介護の必要のない人たちがそこにどう関わるかみたいなことが存在していないのが気になる。もう少しそこら

	辺が身近になると、色々話題にも上がってくるのだろうなと思っている。 （駒村委員） 　英語にできない日本語がいくつかあるらしく、百何十個もあると確認されている。おせっかいを英語で何て言うのか調べたが、ネガティブな意味でしかない。 　おせっかいをポジティブに表現する意味で使っているのは日本ぐらいかもしれないので、これはもしかしたら本当におせっかいと言う言葉を下町で使っていくのは、とても良いのかもしれない。事務局には、おせっかいを英語で言うと何ていうかとポジティブな意味がないか調べておいてほしい。 　おせっかいは非常にユニークな言葉で、突き詰めていくとおせっかいをする方もされる方も、特にする方の健康寿命が延びる可能性があると思うので、やさしいおせっかいと言う言葉は良いと思う。 （鈴木部会長） 　最後に、本日の議論を含めて事務局の方で印象に残ったキーワードの説明をお願いする。 （事務局） 　前回も出てきたおせっかい、先ほどのおせっかい寿命、学校が地域に開かれるという話の中でも、高齢者の関わりというのがまさに良い意味でのおせっかいの視点がすみだの中ではすごく大事にしていかないといけないという思いで聞いていた。 　まず、健康づくりというところの中では、良い生活習慣、データの活用というところに関しては、見える化を図っていくことが何よりも大事であると、無関心層を動かしていくための見える化の仕組み作りが必要であるということで、福祉の部分でも場と出番というものがないと動かないという話があった。やはりそういう仕組みから考えていかないといけないと感じた。 　また、自分が知っている人であれば相談ができると言った言葉は一つ大事なポイントであったかと思っている。人と人とのつながり、おせっかいを通じて、信頼できる関係をどのように構築していくのかというところが健康づくりの中でも共通して出てくる話であると感じた。 　一方で、鎌形委員からも話があったコロナを経て、顔と顔を合わせて話をすることに対する拒否感みたいなのも少し出てきている。それを改めて、墨田区の特性ということだけではなく、大切なものであるということを理解してもらうために、基本構想の中で、顔と顔の見える関係、つながる関係の大切さというものが描ければ良いのではないかと感じている。 　地域包括、その認知度の問題、ニーズがますます増えていくのは間違いがないと言った話もあった。行政の立場からの悩みどころとしては、地域包括が、今非常に業務が増えていて大変な状況になっている状況である。だから、地域包括の人たちの負担を増やさずに、でもしっかりとこういうことをやっているということを理解してもらえて、地域の中でそれを支えよう、一緒になってその地域包括の形を守っていこうというようなことをすることが、もしかすると行政としてはすごく大事であると感じている。

	健康づくりのところで食という切り口もそれこそ乳幼児のところから学校給食のことまであったが、そういったこともすごく大事であると感じたので、上手く取り込みながらすみだらしい言葉で表現をまとめていきたいと感じている。 （鈴木部会長） では、次回の案内をお願いする。 （事務局） 次回の開催予定日、会場については１１月２５日（月曜日）午後７時から、墨田区役所１３階１３１会議室で開催する。 事務局からは以上。 （鈴木部会長） 皆様のご協力のおかげで本当に円滑な運営ができた。 以上で第４回の部会を終了する。 解散
所　管　課	企画経営室政策担当（内線３７２２）